

## 「リハビリ和竿師奮闘記」

今回は、鈴木秋水氏（ペンネーム）の「リハビリ和竿師奮闘記」を紹介いたします。

鈴木さんは当院外来リハビリを利用されていた方です。残念ながら転居のため外来訓練は終了となり、定期的にお会いすることはなくなりましたが、海の近くに移られたそうです。

「リハビリ和竿師奮闘記」は神奈川新聞に定期的に掲載されたコラム記事です。私は和竿の世界は全く素人で分かりませんが、ご本人から以前お聞きした曖昧な記憶では、日本に数人しかいない和竿師の一人であり、著書「和竿づくりの本」も出されています。時々職人さんの患者さんを担当するのですが、現役の方であればなおさら、両手先の研ぎ澄まされた感覚で物を作ってこられた方が脳卒中などで重い障害を持った時の心中はとても想像できるものではありません。鈴木さんにもそうした思いを持ちました。

鈴木さんからこの記事を紹介していただいて読ませていただいて、私は作業療法士という仕事柄、脳卒中者の体験記のようなものを好んでよく読むのですが、穏やかな語り口の中に、和竿師という独特な職人の目に移った自らの身体との格闘、リハビリ観などを読み取ることができました。今回の企画をお話ししたところ、快諾いただきました。

作業療法の訓練の中では、カワハギ釣り専用の竿をリハビリとして試作している、でも右手でどうしても漆が塗れない、どうしたらいいだろうかといった相談も多くいただきました。そのたびに訓練室にある物品を竿や刷毛に見立てて一緒に考えます。そうすると鈴木さんがこれならばどうだろうかと案を出します。それに対し、ちょっと助言をさせていただく、といった貴重な時間を持つことができました。リハビリ室の限られた環境と、私の作業療法士としての限られた知見や想像力で、どうやって麻痺された右手を使って竿を作ったり、魚をおろしたりするのか、必死で想像してついでいこうとしていました。

献身的な美人の奥様と一緒に仲良く来院されていた様子が写真の数カットのように私に焼き付いています。また機会があれば近況などお聞きできたらと願っています。



紹介者：

ふれあい町田ホスピタル リハビリテーション科  
作業療法士 小林幸治